

三条通りプロジェクト 三条通りの見どころ発見 まだまだ知らない三条通りを探そう!

●平成23年4月



広隆寺桂宮院本堂

三条通りを多くの皆さんに愉しく歩いて頂くために、出来るだけ多くの見どころの情報を集め、三条マップ(未完)に掲載します。その一部を紹介します。

- 広隆寺内に建つ桂宮院本堂(国宝)。八角堂の美しい佇まいは見る人の心を癒してくれます。
- 山科の毘沙門堂。江戸初期(1665年建立)。後西天皇皇子の公弁法親王が当寺で受戒したことから門跡寺院となり「毘沙門堂門跡」と称せられる。
- 現存する京唯一の路面電車・嵐電と三条。今年100年目を迎えます。ますます市民に観光客に愛されています。
- 今も動く蹴上の日本初の水力発電所。近代遺産が現役で活躍中です。



蹴上水力発電所



旧三条通りからの
毘沙門堂案内サイン

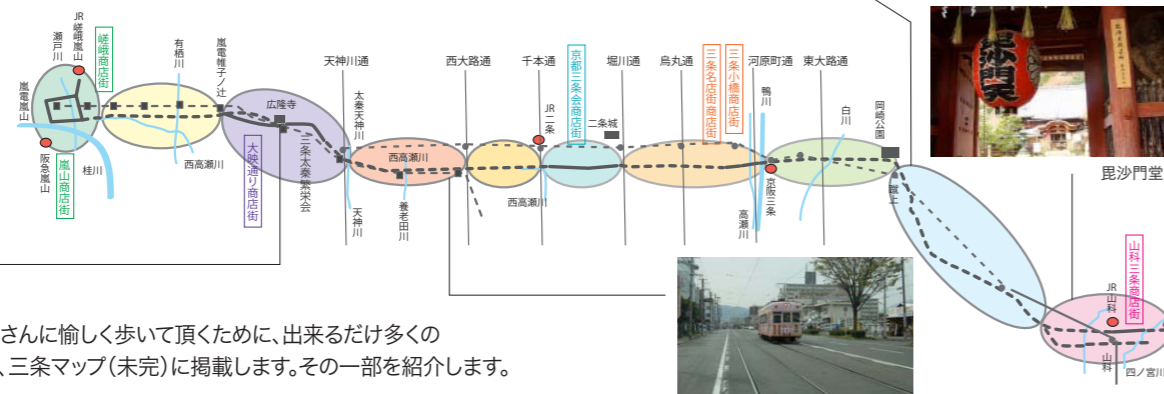


毘沙門堂



嵐電・西大路三条付近

<お願い>
正会員、賛助会員、特別会員の皆さん、三条通りにまつわる見どころがあれば、写真・データ・コメントを事務局に投稿ください。



京都デザイン賞 2011
今年も公募開始!

応募登録締切
2011年
9月30日(金)

新しい
京都の
デザイン公募

詳しくは → www.kyoto-design.net/award.html

正会員の皆様は10月9日(日)
京都市立芸大にて行われる
応募作品の審査にご協力ください。

多くの作品に関する審査には、正会員の皆様のご協力が必要です。是非、これを機会に皆様のご参加をお待ちしております。

詳しくは → 京都デザイン協会事務局 050-3385-8008 まで

2011 京都デザイン協会 会員展
斬新なデザインで扇ぐと、粋な風になる。

舞扇子と団扇展
二十一世紀の和のかたち

一昨年の風呂敷展に続き、今回は京扇子と京団扇のデザイン展を開催いたします。扇子の老舗小丸屋様のご協力により、本格的な仕上げを実現することができました。下記日程で展覧会を予定しております。ぜひ足をお運びください。

テーマ
「日本舞踊と小道具」

●平成23年9月11日(日)～18日(日)
●生活あーと空間 ばるあーと
京都市上京区西洞院通丸太町一筋上る
電話 075-231-5479

詳しくは → <http://www.kyoto-design.net/>

水にこだわりの、原料にこだわりの、製法にこだわりの、このこだわりの心から半兵衛麩の美味しい、麩は生まれます。

創業元年 二年
半兵衛麩
京都・五条大橋東側
TEL 075-525-0008
<http://www.honbey.co.jp>

登録商標
京麩

LOOK! KDA

2011 夏
vol. 4

2011年 1月～7月のご報告

京都デザイン協会会員みなさまにKDAの今を随時ご報告します。

会員のために、京都デザインの明日のためにさまざまな事業活動を実施中。どんどんご参加ください。

2011年 8月15日発行

社団法人 京都デザイン協会
〒604-8247
京都市中京区塩屋町39
TEL:050-3385-8008
FAX:050-3385-8009
URL:<http://www.kyoto-design.net/>
E-mail:info@kyoto-design.net

report 1

第31回 京都デザイン会議 京都のデザインがめざす未来とは

●日時＝平成23年3月11日(金) 午後3時～5時
●場所＝重要文化財 杉本家
●パネラー＝杉本歌子氏 奈良屋記念杉本家保存会学芸員 杉本家古文書の調査研究主任
久谷政樹氏 社団法人 京都デザイン協会 監事 京都造形芸術大学名誉教授
進行/才門俊文氏 社団法人 京都デザイン協会 常務理事 京都デザイン会議実行委員会

江戸中期から続く大店の構えを守ってこられている杉本家の杉本歌子氏と現代のグラフィックデザインをリードする当協会特別会員、久谷政樹氏、伝統建築から現代建築まで幅広く活躍する当協会理事、才門俊文氏とこれからのデザイン世界を担っていく京都の学生達とによる過去・現在・未来を考えながら、京都のデザインは、どのような未来を目指すべきか「京都デザイナーのみらい」を探りました。

当日は「京都デザイナーの未来」ということを題材にしながらも、2時間に渡り、京都の奥深いところのお話まで杉本様、久谷様御二人からお話をいただきました。

杉本家はおおよそ270年前、初代が現在の地に根を下ろし呉服商を営み、千葉県に支店を設け、祖父の時代に株式会社となり、千葉市に「奈良屋パート」を建て営業をするまでになりましたが、歌子様のお父様(9代目)が、20歳の頃、「跡は継がない。筆で立つ。」と大宣言され、営業には携わりませんでした。その

お父様は現代日本を代表するフランス文学者の杉本秀太郎様です。そういう環境の下に生まれ育った杉本様が実体験を通して家に対して悩み反発し、そして40歳を過ぎてようやく自分の足元を発見されたそうですが、そのような経験をされてきた杉本様の話の中に、「揺らぎ」や「気配をうかがい知る感覚」「しつらえる、仕舞うという考え方」「京都のいけず、ヒズナ口」ということが出てまいりました。

一方久谷様は京都を拠点に活躍し現代のグラフィックデザイン界をリードしておられ

すが、戦争のさなか京都で生を受け、京都の「表と裏」、「曖昧さ」という文化のもとで育ち、戦後の新しい教育の中で西洋の特にアメリカの文化に傾倒していきわけですが、ある時期(40歳を過ぎて)そのような自分に疑問を持ち始め、その時に出会ったのが伊藤若冲だそうです。日本文化の再認識。特に江戸狩野派に対する反骨精神から生まれた琳派の再認識。これが琳派研究につながり、「物を真似る」という考え方を否定ではなく肯定的に捕らえるようになります。

杉本様と久谷様は生まれも育ちも京都ということを除けばかなり違うように思われますが、話を聞いていて若い頃の京都(歴史)に対する反発、そして歳を同じくして40歳頃、京都(自分)を再認識される経緯が対談を通じて私には不思議であるとともに、いろいろな世界を見た又は経験した結果であるということでも自然なことなのだとすることに気付いたのです。そして実際、私自身も杉本様、久谷様とよく似た経路をたどっていることに気付かされました。